

# 経営経済学研究の復権

## Die Besserung der Eigenschaft von der Forschung der Betriebswirtschaftslehre

森 哲 彦

Tetsuhiko Mori

### I 序 (Vorwort)

ドイツ経営経済学 (Betriebswirtschaftslehre) の前身は、私経済学 (Privatwirtschaftslehre) である。この私経済学は、商業諸学の科学化、つまり商業諸学の「経済学」化の要請に基づいて形成された。ここでいう「経済学」、すなわち国民経済学 (Volkswirtschaftslehre, Nationalökonomie) は、その研究対象を国民経済とする。この国民経済の部分形成する企業経済を研究する学問が、経営経済学である。従って、経営経済学は、経済科学の一部門として、国民経済学と有機的連関を本来的に有するものである。一方、この経営経済学の形成過程において、ドイツでは、経済学的な意味合いを有しない分野として、企業の諸問題を社会学的に検討する経営社会学 (Betriebssoziologie)<sup>1)</sup>が、1930年代に成立する。また企業の諸問題を技術学的に研究する学問として経営科学 (Betriebswissenschaft) が、さらに心理学的研究として経営心理学 (Betriebspsychologie) が、それぞれ成立している。<sup>2)</sup>そして経営経済学は、それが企業の諸問題の解明を広く課題とするかぎり、経営社会学、経営科学および経営心理学にも関連性を有するものとなる。しかし経営経済学は、それが企業の諸問題のうち、経済学的研究を課題とするかぎり、国民経済学と共に経済科学の一部門を構成するが、他の諸学科と直接的な関連を有するものとはならないのである。

さてドイツ経営経済学固有の研究対象は、企業経済のうちの経営組織問題、経営価値の流れの問題および計算制度問題の領域である。この問題は、例えば戦後では、ハイネン (Heinen, E.)<sup>3)</sup>やコジオール (Kosiol, E.)<sup>4)</sup>、シュナイダー (Schneider, D.)<sup>5)</sup>等が、この枠組を通説として一般に承認するところである。従って、経営経済学の枠組は、企業経済のうちの企業経営を対象とする経営学 (経営経済学の基礎・Grundlagen der Betriebswirtschaftslehre) と同じ企業経済のうちの企業計算を対象とする計算制度論 (Rechnungswesenslehre)・会計学 (Verrechnungswissenschaft) とから構成されるものとなる。ではこのような特質をもつドイツ経営経済学は、わが国ではどのように受容され、今日に至っているのだろうか。

### II 日本経営学の経緯 (Die Umstände der japanischen Betriebswirtschaftslehre)

わが国の経営学は、ドイツ経営経済学とアメリカ経営学、経営管理論（Business Administration）を導入することにより生成、発展してきた。もちろんドイツ経営経済学やアメリカ経営学は、日本的風土<sup>1)</sup>の上に摂取されてきたのである。従って、わが国の経営学の経緯には、過去の日本的独自性が、看過されてはならない。しかしそれと同時に日本経営学に対して、ドイツ経営経済学とアメリカ経営学の果たしている意義・役割は、正当に評価される、<sup>2)</sup>必要があると考えられるのである。

さてわが国における経営学研究が本格化した時期は、ドイツ経営経済学が導入されるようになった大正10（1920）年代からである。<sup>3)</sup> この初期の段階においては、わが国では、学者により、ドイツ経営学<sup>4)</sup>とドイツ会計学（貸借対照表論・Bilanzlehre<sup>5)</sup>のうち、一方のみが論じられた状況もあった。しかし第2次大戦前では、概して経営学と会計学を一対化して論究するというドイツ経営経済学研究の在り方が、主流である。そしてその内容は、正しく「経営経済学」として論じられてきたのである。<sup>6)</sup>

一方、アメリカ経営管理論のわが国への導入は、大正末期であり、その経営学は、テイラー（Taylor, F.W.）の『科学的管理論』<sup>7)</sup>である。またアメリカ会計学のわが国への導入は、ハットフィールド（Hatfield, H.R.）の著書『最近会計学』<sup>8)</sup>の訳出によるもので、大正元年以降である。しかし戦前のアメリカ経営学と会計学研究は、戦前のドイツ経営経済学研究に見られるような影響を、わが国には及ぼしてこなかった。わが国の経営学研究が、アメリカ経営学に傾倒したのは、第2次大戦後である。

従って、わが国の経営学は、戦後においては、アメリカ経営学により形成されてきた。そしてその後、ドイツ社会経済体制の復興にともない、ドイツ経営経済学の導入もわが国に再開され、現在に至ってる、といえよう。そこで、今日のわが国の経営学研究について考える場合、ドイツ経営経済学とアメリカ経営学の相違性と関連性の解明が、必要となるといつてよいであろう。その際、問題は、戦後のわが国のドイツ経営経済学研究に際して、すなわち経営学と会計学を一対化する経営経済学研究に際して、アメリカ経営学の影響により、経営学と会計学を一対化しないドイツ経営学研究、会計学と経営学を一対化しないドイツ会計学研究が見られる、<sup>9)</sup>ところである。この傾向は、日本的風土の一つの現象であるといえるかも知れない。そこで次に、戦後わが国のドイツ経営経済学研究において、ドイツ経営学と会計学の分立に影響を及ぼしたと考えられるアメリカ諸科学、アメリカ経営学の問題点を考察する。

### Ⅲ アメリカ諸科学、経営学の性格（Der Charakter der amerikanischen Wissenschaften und des wissenschaftlichen Managements）

アメリカ経営学は、経営者もしくは管理者の立場からの、彼等の実践上の必要性を基準にしているところの、実用主義的な方法にもとづく管理や組織の研究であるという一般的な学問的性格を有するもの、<sup>1)</sup>とされている。このアメリカ経営学が有する学問的性格は、アメリカにおける諸

科学と同様に、独自の認識論によって特徴付けられる。その諸科学の哲学的認識論は、19世紀後半以降のアメリカに発展して来たところの思想であり、言葉や概念の意味を確定する道具や方法を考えるプラグマティズム (pragmatism) により規定されている、<sup>2)</sup> と言ってよいであろう。

ではプラグマティズムの特質とは何か。まずプラグマティズムの名付け親とされるパース (Peirce, C.S.) によれば「プラグマティズムとは、それ自体は形而上学の学説 (doctrine of metaphysics) でなく、物事の真理を決定する企てでもなく... むずかしい言葉や抽象的概念の意味を突き止める方法 (method) に過ぎない」<sup>3)</sup> とする。もともとパースの思想<sup>4)</sup> は「カントの『純粋理性批判』の一般的結果」<sup>5)</sup> によっているものである。つまりカント (Kant, I.) は、物自体と現象の相互関係について『純粋理性批判』で「付与された対象は現象であって、客観自体としての対象から区別される」<sup>6)</sup> とする。つまり「同一の対象が物自体であると同時に現象であるということ、その対象において物自体は認識不可能だが、まさしくその対象において、物自体は現象する」<sup>7)</sup> ということである。この物自体と現象の相互関係の認識から、パースによれば「カント思想の第一歩... は、われわれのすべての知識が人間の経験 (human experience) および人間の精神 (human mind) の本性に対して、相対的 (relative) である... ということを経験する」とする。そこでパースは、物自体でなく現象としての対象の意味を突きとめようとする方法をプラグマティズムである、<sup>8)</sup> とするのである。

このようにパースのプラグマティズムは、相対主義、多元論、反主知主義の性質を有する。そしてこのパースの思想を、ジェームズ (James, W.) は、新しい真理の理論として提唱し直す。<sup>9)</sup> ジェームズによれば、プラグマティズムとは「ただ一つの方法であるに過ぎない」。<sup>10)</sup> その方法とは「なんら特殊な結果でなく、定位の態度であるに過ぎない。すなわち最初のもの、原則、「範疇」、想定された必然性から目をそむけ、最後もの、成果、帰結、事実に向おうとする態度」<sup>11)</sup> のことである。そして「いかなる観念 (idea) も我々をして、我々の一部分から他の部分へと満足のゆくような関係に入ることを可能にするという限りにおいて、真理であり... 道具という意味で真理である」。<sup>12)</sup> それゆえ「観念は、真理であるから有用 (useful) である」<sup>13)</sup> とするのである。換言すれば、プラグマティズムによる人間の認識作用は、事象を本質究明するのではなく、人間が直面する問題や必要を解決するためのものである。それゆえ認識の真理性とは、人間がその認識を通じて実践上の帰結を得ることが可能であること、すなわち「有用」であることのうちに存するものとなる、<sup>14)</sup> のである。

このような特質をもつプラグマティズムの思想にもとづき、アメリカ経営学を構想すると次のようになるであろう。つまりアメリカ経営学は、企業の管理や組織問題を研究することはもちろんである。しかしそれは、企業それ自体、または企業の一般性や本質の解明を志向するものではない。アメリカ経営学は、企業の目的や目標を達成するための活動をいかに有効かつ実行的に行うかの「方法」を探究する学問となる。このようなアメリカ経営学の事態について、1961年にクーンツ (Koontz, H.D.) が、はじめて指摘したように、いわゆる「管理論のジャングル (management theory jungle)」<sup>15)</sup> 状況が挙げられるのである。従って、アメリカ経営学の一般的性格は、

実用主義的な方法にもとづく管理や組織の研究であるという点に求められるのである。アメリカ経営学をこのように思考すると、アメリカ会計学は、企業の諸問題のうちの計算現象について、利益追求目標の実践上の必要性を基準とする実用主義的な方法にもとづく研究となるであろう。

このように企業経済現象を実用主義的に考察するため、アメリカ経営学と会計学は、分離されて成立するものとなるのである。それゆえアメリカ経営学と会計学の分立の必然性は、その方法から言っても、理解し得るところである。このことは、アメリカ経営学の代表的な論者達<sup>16)</sup>の見解には会計学は展開されておらず、またアメリカ会計学の代表的な論者達<sup>17)</sup>の主張には経営学が含まれていないことから明白である。それゆえアメリカ学界では、経営学と会計学は、別個の学問として成立し、発展してきたと言う性格を持つことになるのである。

#### Ⅳ ドイツ経営経済学の特質 (Die Eigenschaften der deutschen Betriebswirtschaftslehre)

わが国の経営学と会計学研究は、既述のように、第二次大戦前においては、経営学と会計学を一つの枠組として把握するドイツ経営経済学の影響下にあった。<sup>18)</sup>しかし戦後のわが国では、学問のアメリカ化と大学カリキュラムの分化に伴い、経営学と会計学を別個の学科とする見解が通説を形成する。例えば、青木茂男は「経営学の部分として会計学をとらえる見方と会計学を経営学から切り離して、独立した学問領域とみなす見解がある。前者はドイツ経営学の見方であり、後者はアメリカの取り扱いである。…戦後の日本では、アメリカの影響が強くなったことによって、経営学と会計学とは一応分離され、それぞれが独立の研究領域となっている」<sup>19)</sup>とする。また中村忠も「わが国では、会計学と経営学ははっきり分かれている。…経営学は、経営内部における計算的な面を取り扱うが、その外に経営組織や人間問題を取り扱う」。「会計原則論を中心とする今日の会計学は」、「経営学とは別個の独立性をもたなければならない」<sup>20)</sup>とする。<sup>21)</sup>わが国ではこのようにアメリカ学界にならい経営学と会計学を分離して論じることを通説としている、<sup>22)</sup>と言ってよいであろう。このことにより、わが国のドイツ経営経済学研究に際しても、企業経済のうちの企業経営や学説のみを対象とするドイツ経営学の研究や、企業計算や学説を単独に取り扱うドイツ会計学、貸借対照表論 (Bilanzlehre) の研究を別個に成立させ、展開することが、正当性をもつかのような動向が見られる、<sup>23)</sup>のである。

このように見てくると、プラグマティズムに基づくアメリカ経営学研究の主流化は、他方でわが国の戦後のドイツ経営経済学の研究の在り方について、アメリカ的に変容した面をもたらしただけではないか、と考えられる。しかし戦後のわが国においても「経営学の部分として会計学をとらえる」ドイツの見方を取る見解も存する。例えば、斉藤隆夫は「会計を経営の中で一つの制度として考える…換言すれば、会計学を経営学と相互依存の関係で取り扱う」とし「経営学を総合的に考察し、その中に会計学を位置づけるのが最も正しい方法である」<sup>24)</sup>とする。また山本安次郎も「会計は、経営に固有の職能である。このことから…会計学は、自律性をもつよりはむしろ経営学の一部門である」<sup>25)</sup>とする。そこでドイツ学界において、経営学と会計学の枠組みを構成する

経営経済学者名を挙げると次のようである。例えば、戦前のシェアー (Schär, J.F.)、<sup>8)</sup>ニックリッシュ (Nicklisch, H.)、<sup>9)</sup>さらに戦後のグーテンベルク (Gutenberg, E.)、<sup>10)</sup>ヴェーエ (Wöhe, G.)<sup>11)</sup>等の経営経済学は、企業経済それ自体と企業経営現象および企業計算現象の解明を企てるのである。従って、ドイツでは伝統的な経営経済学のもつ経営学と会計学の枠組みは、現代においても通説である。

しかし戦後においては、ドイツ学界へのアメリカ諸科学の影響にともない、ドイツ経営経済学に対するアメリカ経営学の影響は、日本の経営学界ほどではないにせよ、指摘されるところである。例えば、シャンツ (Schanz, G.) は、アメリカ諸科学に見られる行動科学をポパー (Popper, K.R.)<sup>12)</sup>やアルバート (Albert, H.)<sup>13)</sup>の主張する批判的合理主義の立場から、伝統的なドイツ経営経済学に加えて、新しい『行動理論的経営経済学』<sup>14)</sup>を1977年に提唱した。またサンクト・ガレン学派のブライヒャー (Bleicher, K.) は、アメリカ経営学のManagement用語をそのまま前面に出し、ルーマン (Luhmann, N.)<sup>15)</sup>の社会システム論に依拠して、1994年著書『標準的マネジメント論』<sup>16)</sup>を刊行している。ただしこのような著書には、企業計算を論述する計算制度論は、展開されていない。そしてドイツ経営経済学界では、これらの潮流は、評価されねばならないとは言え、少数である。従って、ドイツ学界では、経営学と会計学 (計算制度論) を一対として把握する伝統的な経営経済学が、依然として主流である。例えば、戦後のグーテンベルクによれば、経営経済学にとって「企業指導の経営政策上の決定は、広く計算制度の効果に基づいており、計算制度の成果は、経営事象を明らかにし、従ってまた、その経営事象を見通しかつ導く」<sup>17)</sup>とする。また近年のヴェーバー (Weber, W.) によれば「経済科学〔経営経済学〕や経済行動にとっても、重要で、長い伝統を有する一つの領域は計算制度で」<sup>18)</sup>あり、その「計算制度において分析された情報は、経営の意志決定...にとって重要な情報の基礎でもある」<sup>19)</sup>とする。このようにドイツ経営経済学界においては、戦後においても、経営学と会計学は、相互関連付けて論じられるのが、通説である。

一方、既述のようにアメリカ経営学や会計学は、それが目標達成志向者の実践上の必要性を基準とし、企業経済現象を与件とし、それを思考の前提とするので、企業経済の本質究明を直接的に対象としない。これに対し、ドイツ経営経済学は、企業経済を「与件として受けとめるのではなく」<sup>20)</sup>企業経済それ自体、つまり企業経済の内的必然的な連関、一般性や普遍妥当性、本質の究明を思考するものである。それゆえドイツ経営経済学のこの本質究明を思考する方法には、哲学 (論理的、原理的思考)・思想 (現実的、事物的思考) および社会科学方法論が、基礎付けられている。従って、ドイツ経営経済学の戦前、戦後に見られるような数次に渡る方法論争<sup>21)</sup>は、ドイツに固有のものである。つまりこのような方法論を有するドイツ経営経済学は、対象の統一性や経営学と会計学の関連性を問題とするものとなるのである。従って、ドイツ経営経済学は、企業経済それ自体を考察し、企業経営現象の生産的、販売的、財務的考察と、企業計算現象の価値的考察により構成されるものとなるのである。

## V 結 (Schluß)

グローバリゼーションの進展する現代資本主義社会において、企業経済活動は、多様化、複雑化、不確実性の下で、さらなる展開が要請される場所である。そのためにもこの企業経済それ自体とその下に生成する諸現象を、原理的、相互関連的に把握する経営経済学研究の必要性が出てくるものとなると言えよう。今や、わが国の経営学と会計学研究は、アメリカ諸科学の影響下であって、分離され、それぞれが独立の研究分野となっている。しかもわが国のドイツ経営経済学研究においてさえ、経営学と会計学が分離して研究される傾向すら存在する。このように異なった方法や対象を受け入れると言う日本的風土の下に、わが国の経営学は、それが新しい学問を打ち立てようとしても、多様化する企業経済それ自体とその現象の原理的、現実的把握を、困難とするであろう。そこでこの企業経済それ自体とその現象の原理的、相互関連的把握を思考するために、経営学と会計学を不可分の一对として含んでいる経営経済学研究の構築が求められる。そこでの研究の偏向を避けるため、経営経済学をその理論の歴史部分である経営経済学史<sup>1)</sup>として改めて本来的に検討することには、一つの学問的営為として意義があると思われる。換言すれば、研究課題は、戦後アメリカ経営学の影響を受けたわが国におけるドイツ経営経済学研究の一部の軌跡を自己否定し、経営学と会計学を一つの枠組みとして把握する本来的な経営経済学研究の復権に自己限定することである。

(注)

### I 序

1) 経営社会学の古典として、次のような文献が挙げられる。

Geck, Ludwig Heinrich Adolf: *Die sozialen Arbeitsverhältnisse in Wandel der Zeit*, 1931.

Briefs, Götz: *Betriebsführung und Betriebslehre in der Industrie*, 1943.

2) Vgl. Gutenberg, Erich: *Einführung in die Betriebswirtschaftslehre*, Verlag DR. TH. Gabler, Wiesbaden 1958.S.13-14. (池内信行監訳・杉原信男・吉田和夫訳『グーテンベルク 経営経済学入門』千倉書房、1959年、3-5ページ参照)。

3) Heinen, Edmund: *Einführung in die Betriebswirtschaftslehre*, 1. Aufl., Wiesbaden 1968. (溝口一雄監訳・谷武幸・中善弘訳『ハイネン 経営経済学入門』千倉書房、1973年)。

Heinen: *Handelsbilanzen*, 1. Aufl., Wiesbaden 1958.

Heinen: *Betriebswirtschaftliche Kostenlehre*, Bd. 1.: *Grundlagen*, Wiesbaden 1959. (溝口一雄訳・宮本匡章・小林哲夫訳『原価計算論』中央経済社、1964年)。

4) Kosiol, Erich: *Bausteine der Betriebswirtschaftslehre*, Eine Sammlung ausgewählter Abhandlungen, Ansätze und Verträge, Bd.1.: *Methodologie, Grundlagen und Organisation*. Bd.2.: *Allgemeine Rechnungswesen, Pagatorisches Rechnungswesen und Kalkulatorische Rechnungswesen*, Dunker und Humblot, Berlin 1973.

5) Schneider, Dieter: *Allgemeine Betriebswirtschaftslehre*, 3. Aufl., München/Wien 1987.

Schneider: *Betriebswirtschaftslehre*, Bd.1.: *Grundlagen*. Bd.2.: *Rechnungswesen*. Bd.3.: *Theorie der*

*Unternehmung*. Bd.4.: *Geschichte und Methoden der Wirtschaftswissenschaft*, R. Oldenbourg Verlag, München/Wien 1995-2001.

## Ⅱ 日本経営学の経緯

- 1) 日本の風土については、次の文献を参照。和辻哲郎『風土—人間的考察』岩波書店、1935年。
- 2) 大橋昭一編著『現代のドイツ経営学』税務経理協会、1991年、はじめに 2 ページを参照。
- 3) 日本経営学の成立期について、例えば、坂本藤良によれば、それは大正後期で「ドイツ経営経済学の紹介と方法論的考察の深化」の「新しい段階」に求めている（坂本藤良『経営学史』ダイヤモンド社、1959年、286-290ページ）。また裴富吉は「大正中期〔いちおう第1次大戦終結後〕に日本経営学史の出発点を求める」とする（裴富吉『経営学発達史—理論と思想—』学文社、1990年、15ページ）。
- 4) 渡辺鏡蔵『商事経営論』修文館、1922年。
- 5) 上野道輔『貸借対照表』有斐閣、1922年。
- 6) 経営学と会計学を一对とした経営経済学研究として、戦前では例えば、次の文献が挙げられる。  
 中西寅雄『経営経済学』日本評論社、1931年。  
 中西寅雄『経営費用論』千倉書房、1936年。  
 小高康雄『経営経済学』慶應出版社、1943年。  
 小高康雄『経営計算論』巖松堂書店、1940年。
- 7) Taylor, Frederick Winslow: *Principles of Scientific Management*, 1912. New York, 1947. (上野陽一訳編『科学的管理法』技報堂、1957年)。  
 国松豊『科学的管理法綱要』巖松堂書店、1924年。
- 8) Hatfield, Henry Rand: *Modern Accounting*, 1910. (海老原竹之助訳『最近会計学』博文堂、1912年)。
- 9) 森哲彦「近年の経営経済学史研究」『会計』森山書店、第154巻第5号、1998年11月を参照。

## Ⅲ アメリカ諸科学、経営学の性格

- 1) 権康吉『アメリカ経営学の展開』白桃書房、1981年、3 ページ。
- 2) 伊藤森右衛門「アメリカ経営学」平井泰太郎編『経営学事典』所収、青林書院新社、1964年、100ページを参照  
 権『前掲書』2 ページを参照。
- 3) Peirce, Charles Sanders: *The Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts: Edited by Charles Hartshorne and Paul Weiss, Vol.5, 1934. Fourth Printing, 1978. p.317. (内田種臣編訳「記号論」『パース著作集2』勁草書房、1986年、176-177ページ)。
- 4) パースの思想研究については、例えば、次のような文献が挙げられる。  
 鶴見俊輔『アメリカ哲学—プラグマティズムのおお解釈し、発展させるか—』世界評論社、1950年。  
 伊藤邦武『プラグマティズム—可謬主義的知識論の展開—』勁草書房、1985年。
- 5) Peirce: *op.cit.*, Vol.4, 1934. Fourth Printing, 1978. p.72. (遠藤弘編訳「形而上学」『パース著作集3』勁草書房、1986年、88ページ)。
- 6) Kant, Immanuel: Kritik der reinen Vernunft, 1781, in: *Kant Werke*, Hrsg., Ernst Cassirer, Bd.3, 1922. S. 69. (篠原英雄訳『純粹理性批判』上巻、岩波文庫、岩波書店、1962年、117ページ。原裕訳『純粹理性批判』カント全集第4巻、理想社、1973年、148ページ)。
- 7) Adickes, Erich: *Kant und das Ding an sich*, Pan Verlag Rolf Heise, Berlin 1924. S.20. (赤坂常弘訳、エーリッヒ・アディッケス『カントと物自体』法政大学出版局、1976年、26ページ)。
- 8) Peirce: *op.cit.*, Vol.4, p.72. 前掲訳『パース著作集3』88ページ。

- 9) ジェームズの思想研究については、例えば、次のような文献が挙げられる。  
 今井仙一『ウィリアム・ジェームズの哲学』白日書院、1948年。  
 今田恵『アメリカ哲学の源流—ジェームズとその思想』養徳社、1951年。
- 10) James, William: *Pragmatism, a New Name for Some Old Ways of Thinking*, Popular Lecture on Philosophy 1907. in: General Editor, Frederick H. Burkhard, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts and London, England, 1975. p.31. (榊田啓三郎訳『プラグマティズム』岩波文庫、岩波書店、1957年、43ページ。榊田啓三郎訳「プラグマティズム」『ウィリアム・ジェームズ著作集5』所収、日本教文社、1960年、43ページ)。
- 11) *Ibid.*, p.32. 前掲岩波訳、43ページ。前掲著作集訳、44ページ。
- 12) *Ibid.*, p.34. 前掲岩波訳、48ページ。前掲著作集訳、47ページ。
- 13) *Ibid.*, P.98. 前掲岩波訳、149ページ。前掲著作集訳、158ページ。
- 14) 伊藤邦武「プラグマティズム」木田元他編『コンサイス20世紀思想事典』所収、三省堂、1989年、708ページを参照。
- 15) Koontz, Harold: "The Management Theory Jungle", in: *Journal of the Academy of Management*, Dec. 1961.
- 16) アメリカの代表的な経営学者として、例えば、戦前では、テイラー (Taylor, F.W.)、バーナード (Barnard, C.I.)、戦後では、サイモン (Simon, H.A.)、ドラッカー (Drucker, P.F.) が挙げられる。  
 Taylor, Frederick Winslow: *Shop Management*, 1903. New York, 1911. (都築栄訳『工場管理論』理想社、1958年)。  
 Taylor: *Principles of Scientific Management*, 1912. New York, 1947. (上野陽一訳編『科学的管理法』技報堂、1957年)。  
 Barnard, Chester Irving: *The Funktion of the Executive*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1938. (山本安次郎・田杉競・飯野春樹訳『新訳 経営者の役割』ダイヤモンド社、1968年)。  
 Barnard: *Organization and Management*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1948.  
 Simen, Hervert Alexander: *Administrative Behavior; A Study of Decision-Making*, New York, 1945. 2nd ed., 1957. (松田武彦・高柳暁・二村敏子訳『経営行動』ダイヤモンド社、1965年)。  
 Drucker, Peter Fredinand: *The Practice of Management*, New York, 1954. (現代経営研究会『現代の経営』上下、ダイヤモンド社、1965年)。  
 Drucker: *The Effective Executive*, New York, Evanston, London, Heinemann, 1966. (野田一夫・川村欣也訳『経営者の条件』ダイヤモンド社、1966年)。
- 17) アメリカの代表的な会計学者として、例えば、戦前では、ハットフィールド (Hatfield, H.R.)、ペイトン (Paton, W.A.)、戦後では、バッター (Vatter, J.W.)、ベッドフォード (Bedford, N.M.) が挙げられる。  
 Hatfield, Henry Rand: *Modern Accounting*, 1910. (海老原竹之助訳『最近会计学』博文館、1912年)。  
 Paton, William Andrew: *Principles of Accounting*, 1916.  
 Vatter, J. William: *The Fund Theory of Accounting and Its Implications for Financial Reports*, 1947.  
 Bedford, Norton Moore: *Income Determination Theory, An Accounting Framwork*, 1965.

#### N ドイツ経営経済学の特徴

- 1) 会計学が、経営経済学の影響下にある指摘について、例えば、小高康雄は「従来、会計学は、経営経済学と最も密接な関係にあるものとして取り扱われて来た」としている (小高、前掲『経営経済学』15ページ)。
- 2) 青木茂男「管理会計と経営学」後藤幸男他編『経営学を学ぶ』所収、有斐閣選書、1971年、274ページ。



- 3) 中村忠『現代会計学』白桃書房、新版全訂版、1975年、17-18ページ。
- 4) 森「前掲稿」86ページ。
- 5) ドイツ経営学とドイツ会計学と切り離し、別個の領域とみなすわが国の最近の研究には、例えば、次の文献が挙げられる。  
岡本人志『ドイツの経営学』森山書店、1997年。  
五十嵐邦正『静的貸借対照表論の研究』森山書店、1996年。  
そこで、ドイツ経営学を論究した岡本人志『前掲書』とドイツ会計学を研究した五十嵐邦正『前掲書』を対比すると、岡本は会計学研究の重要性を指摘しながら「会計学を管轄」外とし、一方、五十嵐は、経営学研究の必要性を指摘しつつも、経営学には論究しない、のである（森「前掲稿」94ページを参照）。
- 6) 斉藤隆夫『会計制度の基礎』森山書店、1975年、増補版1987年、はじめに、1-2ページ。
- 7) 山本安次郎『経営学本質論』森山書店、1961年、第二版1965年、307ページ。
- 8) Schär, Johann Friedrich: *Allgemeine Handelsbetriebslehre*, Bd.1, 1. Aufl., Leipzig 1911.  
Schär: *Buchhaltung und Bilanz*, 1. u.2. Aufl., Berlin 1914.
- 9) Nicklisch, Heinrich: *Die Betriebswirtschaft*, 7. Aufl., Der wirtschaftlichen Betriebslehre, Lieferung 1, Allgemeines und Grundlagen, C. E. Poeschel Verlag, Stuttgart 1929. Lieferung 2, Der Betrieb, 1930. Lieferung 3, Das Rechnungswesen, 1932.
- 10) Gutenberg, Erich: *Einführung in die Betriebswirtschaftslehre*, Verlag DR. TH. Gabler, Wiesbaden 1958. (池内信行監訳・杉原信男・吉田和夫訳『グーテンベルク 経営経済学入門』千倉書房、1959年)。
- 11) Wöhe, Günter: *Einführung in die Allgemeine Betriebswirtschaftslehre*, 1. Aufl., Verlag Franz Vahlen GmbH., München 1960. 16. Aufl., 1986
- 12) Popper, Karl Reimund: *Conjectures and Reflections*, The Growth of Scientific Knowledge, London, 1963. (藤本隆志・石垣壽郎・森博訳『推測と反駁』法政大学出版局、1980年)。  
Popper: *Die offene Gesellschaft und ihre Feinde*, Bd.1.: *Der Zauber Platons*. Bd.2.: *Falsche Propheten, Marx und die Folgen*, Berlin/München 1973. (小笠原誠訳『開かれた社会—開かれた宇宙』未来社、1980年)。
- 13) Albert, Hans: *Traktat über kritische Vernunft*, 3. Aufl., Tübingen 1975. (荻原能久訳『批判的理性論考』御茶の水書房、1985年)。
- 14) Schanz, Günther: *Grundlagen der verhältnistheoretischen Betriebswirtschaftslehre*, Tübingen 1977.
- 15) Luhmann, Niklas: *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1984. (佐藤勉監訳『社会システム論』上下巻、恒星社厚生閣、1993年、1995年)。
- 16) Bleicher, Knut: *Normatives Management: Politik, Verfassung und Philosophie des Unternehmens*, das St.Galler Management-Konzept, Bd.5, Campus Verlag, Frankfurt/New York 1994.
- 17) Gutenberg: a.a.O., S. 131.『前掲訳』179ページ。
- 18) Weber, Wolfgang: *Einführung in die Betriebswirtschaftslehre*, Verlag Gabler, Wiesbaden 1991. S. 194. ((第二版) 深山明・海道ノブチカ監訳『ヴェーバー 経営経済学入門』中央経済社、1996年、209ページ)。
- 19) Ebd., S. 195.『前掲訳』219ページ。
- 20) 池内信行『現代経営理論の反省』森山書店、1958年、15ページ。
- 21) ドイツ経営経済学の方法論争については、次を参照。  
森哲彦「ドイツ経営学論考」『研究紀要』（名古屋市立大学人文社会学部）第8号、2000年3月。

## V 結

- 1) 経営経済学史の意義、方法、課題については、次を参照。  
森哲彦『経営学史序説—ニックリッシュ私経済学論—』千倉書房、1993年、第1章、経営学史の研究方法与課題。

## 引用文献一覧 (Literaturverzeichnis)

- Adickes, Erich: *Kant und das Ding an sich*, Pan Verlag Rolf Heise, Berlin 1924. (赤坂常弘訳、エーリッヒ・アディッケス『カントと物自体』法政大学出版局、1976年)。
- Albert, Hans: *Traktat über kritische Vernunft*, 3. Aufl., Tübingen 1975. (荻原能久訳『批判的理性批判』御茶の水書房、1985年)。
- 青木茂男「管理会計と経営学」後藤幸男他編『経営学を学ぶ』所収、有斐閣選書、1971年。
- 裴富吉『経済学発達史—理論と思想—』学文社、1990年。
- Barnard, Chester Irving: *The Funktion of the Executive*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1938. (山本安次郎・田杉競・飯野春樹訳『新訳 経営者の役割』ダイヤモンド社、1968年)。
- : *Organization and Management*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1948.
- Bedford, Norton Moore: *Income Determination Theory, An Accounting Framwork*, 1965.
- Bleicher, Knut: *Normatives Management: Politik, Verfassung und Philosophie des Unternehmens*, das St. Galler Management-Konzept, Bd.5, Campus Verlag, Frankfurt/New York 1994.
- Briefs, Götz: *Betriebsführung und Betriebslehre in der Industrie*, 1943.
- Drucker, Peter Fredinand: *The Practice of Management*, New York, 1954. (現代経営研究会『現代の経営』上下、ダイヤモンド社、1965年)。
- : *The Effective Executive*, New York, Evanston, London, Heinemann, 1966. (野田一夫・川村欣也訳『経営者の条件』ダイヤモンド社、1966年)。
- Geck, Ludwig Heinrich Adolf: *Die sozialen Arbeitsverhältnisse in Wandel der Zeit*, 1931.
- 権康吉『アメリカ経営学の展開』白桃書房、1981年。
- Gutenberg, Erich: *Einführung in die Betriebswirtschaftslehre*, Verlag DR. TH. Gabler, Wiesbaden 1958. (池内信行監訳・杉原信男・吉田和夫訳『グーテンベルク 経営経済学入門』千倉書房、1959年)。
- Hatfield, Henry Rand: *Modern Accounting*, 1910. (海老原竹之助訳『最近会計学』博文堂、1912年)。
- Heinen, Edmund: *Handelsbilanzen*, 1. Aufl., Wiesbaden 1958.
- : *Betriebswirtschaftliche Kostenlehre*, Wiesbaden 1959. (溝口一雄監訳・宮本匡章・小林哲夫訳『原価計算論』中央経済社、1964年)。
- : *Einführung in die Betriebswirtschaftslehre*. 1. Aufl., Wiesbaden 1968. (溝口一雄訳・谷武幸・中善弘訳『ハイネン 経営経済学入門』千倉書房、1973年)。
- 五十嵐邦正『静的貸借対照表論の研究』森山書店、1996年。
- 池内信行『現代経営理論の反省』森山書店、1958年。
- 今田恵『アメリカ哲学の源流—ジェームズとその思想』養徳社、1951年。
- 今井仙一『ウィリアム・ジェームズの哲学』白晝書院、1948年。
- 伊藤邦武『プラグマティズム—可謬主義的知識論の展開—』勁草書房、1985年。
- 「プラグマティズム」木田元他編『コンサイス20世紀思想事典』所収、三省堂、1989年。
- 伊藤森右衛門「アメリカ経営学」平井泰太郎編『経営学事典』所収、青林書院新社、1964年。
- Jemes, William: *Pragmatism, a New Name for Some Old Ways of Thinking*, Popular Lecture on Philosophy 1907. in: General Editor, Frederick H. Burkhard, Harvard University Press, Cambrige, Massachusetts and London, England, 1975. (榊田啓三郎訳『プラグマティズム』岩波文庫、岩波書店、1957年。榊田啓三郎訳『ウィリアム・ジェイムズ著作集5』日本教文社、1960年)。
- Kant, Immanuel: *Kritik der reinen Vernunft*, 1781, in: *Kant Werke*, Hrsg., Ernst Cassierer, Bd.3, 1922. (篠原英雄訳『純粹理性批判』上巻、岩波文庫、岩波書店、1962年。原裕訳『純粹理性批判』カント全集第4巻、理想社、1973年)。
- Koontz, Harold: "The Management Theory Jungle", in: *Journal of the Academy of Management*, Dec. 1961.

- Kosiol, Erich: *Bausteine der Betriebswirtschaftslehre*, Eine Sammlung ausgewählter Abhandlungen, Ansätze und Verträge, Bd.1.: *Methodologie, Grundlagen und Organisation*. Bd.2.: *Allgemeine Rechnungswesen, Pagatorisches Rechnungswesen und Kalkulatorische Rechnungswesen*, Dunker und Humblot, Berlin 1973.
- 国松豊『科学的管理法綱要』嚴松堂書店、1924年。
- Luhmann, Niklas: *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1984. (佐藤勉訳『社会システム論』上下巻、恒星社厚生閣、1993年、1995年)。
- 森哲彦『経営学史序説—ニックリッシュ私経済学論—』千倉書房、1993年。
- 「近年の経営経済学史研究」『會計』森山書店、第154号第5号、1998年11月。
- 「ドイツ経営学論考」『研究紀要』(名古屋市立大学人文社会学部)第8号、2000年3月。
- 中村忠『現代会計学』白桃書房、新版全訂版、1975年。
- 中西寅雄『経営経済学』日本評論社、1931年。
- 『経営費用論』千倉書房、1936年。
- Nickisch, Heinrich: *Die Betriebswirtschaft*, 7. Aufl., Der wirtschaftlichen Betriebslehre, Lieferung 1, Allgemeines und Grundlagen, C. E. Poeschel Verlag, Stuttgart 1929. Lieferung 2, Der Betrieb, 1930. Lieferung 3, Das Rechnungswesen, 1932.
- 小高康雄『経営計算論』嚴松堂書店、1940年。
- 『経営経済学』慶應出版社、1943年。
- 大橋昭一編著『現代のドイツ経営学』税務経理協会、1991年。
- 岡本人志『ドイツの経営学』森山書店、1997年。
- Paton, William Andrew: *Principles of Accounting*, 1916.
- Peirce, Charles Sanders: *The Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts: Edited by Charles Hartshorne and Paul Weiss, Vol.4,5, 1934. Fourth Printing, 1978. (内田種臣編訳『パース著作集2』、遠藤弘編訳『パース著作集3』勁草書房、1986年)。
- Popper, Karl Reimund: *Conjectures and Reflections, The Growth of Scientific Knowledge*, London, 1963. (藤本隆志・石垣壽郎・森博訳『推測と反駁』法政大学出版局、1980年)。
- : *Die offene Gesellschaft und Feinde*, Bd.1.: *Der Zauber Platons*. Bd.2.: *Falsche Propheten, Hegel, Marx und die Folgen*, Berlin/München 1973. (小笠原誠訳『開かれた社会—開かれた宇宙』未来社、1992年)。
- 齊藤隆夫『会計制度の基礎』森山書店、1975年、増補版1987年。
- 坂本藤良『経営学史』ダイヤモンド社、1959年。
- Schanz, Günther: *Grundlagen der verhältnistheoretischen Betriebswirtschaftslehre*, Tübingen 1977.
- Schär, Johann Friedrich: *Allgemeine Handelsbetriebslehre*, Bd.1, 1. Aufl., Leipzig 1911.
- : *Buchhaltung und Bilanz*, 1. u. 2. Aufl., Berlin 1914.
- Schneider, Dieter: *Allgemeine Betriebswirtschaftslehre*, 3. Aufl., München/Wien 1987.
- : *Betriebswirtschaftslehre*, Bd.1.: *Grundlagen*. Bd.2.: *Rechnungswesen*. Bd.3.: *Theorie der Unternehmung*. Bd.4.: *Geschichte und Methoden der Wirtschaftswissenschaft*, R. Oldenbourg Verlag, München/Wien 1995–2001.
- Simen, Hervert Alexander: *Administrative Behavior; A Study of Decision-Making*, New York, 1945. 2nd ed., 1957. (松田武彦・高柳暁・二村敏子訳『経営行動』ダイヤモンド社、1965年)。
- Taylor, Frederick Winslow: *Shop Management*, 1903. New York, 1911. (都築栄訳『工場管理論』理想社、1958年)。
- : *Principles of Scientific Management*, 1912. New York, 1947. (上野陽一訳編『科学的管理法』技報堂、1957年)。

鶴見俊輔『アメリカ哲学—プラグマティズムのおどろおどろしい発展—』世界評論社、1950年。

上野道輔『貸借対照表』有斐閣、1922年。

Vatter, J. William: *The Fund Theory of Accounting and Its Implications for Financial Reports*, 1947.

渡辺鉄蔵『商事経営論』修文館、1922年。

和辻哲郎『風土—人間の考察』岩波書店、1935年。

Weber, Wolfgang: *Einführung in die Betriebswirtschaftslehre*, Verlag Gabler, Wiesbaden 1991. ((第二版) 深山明・海道ノブチカ監訳『ウェーバー 経営経済学入門』中央経済社、1996年)。

Wöhe, Günter: *Einführung in die Allgemeine Betriebswirtschaftslehre*, 1. Aufl., Verlag Franz Vahlen GmbH., München 1960. 16. Aufl., 1986.

山本安次郎『経営学本質論』森山書店、1961年、第二版1965年。